

OVERSEAS

Angola —アンゴラ—

海外事情【寄稿】



何故かもう一度行きたくなる国



吉川幸伸 YOSHIKAWA Yukinobu

株式会社日本港湾コンサルタント
技術本部/地球環境・エネルギー室

まずは予防注射から

Angola. この国名を耳にしたことのある人はそれほど多くはないであろう。アフリカ南西部に位置し、つい数年前まで、30年にも亘って内戦をしていた国である。あの黒柳徹子さんが何度か訪れている。アンゴラは旧ポルトガル領であったため、公用語はポルトガル語。通貨はクワンザで、1US\$ = 75KZ。その他のアンゴラ情報は「駐日アンゴラ共和国大使館ホームページ」に非常に詳しく紹介されている。

この国への出張が決まったの

は、出発の1ヶ月前。日本人に馴染みの深い国にしか赴いたことのない私が、アフリカに行くことになったのである。

まず気になったのは、何の予防注射が必要なのか…。アンゴラに入国するには黄熱病のみが必須であったが、A型肝炎、破傷風と気になるものはすべて体内へ注入。「ここまでして病気になるなら運がない」と自分に言い聞かせ、万全の態勢で出国。

なお、このレポートではアンゴラに赴き、体験したこと、感じたことを率直にお伝えしたいと考え

ている。これより、3週間のアンゴラ滞在記の始まりである。

日本よりも高い物価

アンゴラ共和国の首都であるルアンダには、空路で成田から香港、ヨハネスブルグ(南アフリカ)を経由し到着した。

ヨハネスブルグからルアンダに向かう飛行機では、中国人とベトナム人の多さに驚かされた。空港職員にまで「ニーハオ」と声をかけられる始末。石油権益をめぐる、中国のアンゴラへの進出はすさまじく、土木・建築作業員までも中

国から大量投入…。

ルアンダ到着と同時に驚かされたのは車の数。300万人が住むと言われるルアンダは、車の多さは半端ではない。しかも信号が数カ所しかない。駐車場もない。よって、車は無秩序に走り、渋滞も想像を超えていた。車を所有していない人は、独特な水色にペイントされた乗合タクシーを利用し、毎朝ルアンダ中心部に向かう(写真1)。たった数km離れた場所での打合せも、1時間前の出発では間に合わないことがあったほどである。

また、アンゴラは日本よりも物価が高い。石油やダイヤモンドが採掘できることで、実は裕福な国なのである。廃墟のようなマンションでさえ、家賃は1ヶ月で100万円もする。しかし、この恩恵を受けているのは一部の人であり、大多数の国民は貧困にあえいでいるのだ。少し郊外へ出れば、掘っ建て小屋がずらりと並ぶ(写真2)。食事をするにしても、ハンバーガーとポテトで1,000KZ程度(約13US\$)。夜となると2,000~3,000KZ(約26~40US\$)は平気にかかる。開発途上国への出張だとタカをくくっていると、あっという間に紙幣は飛んで行く。

無難な車で移動するが…

もちろんルアンダでの視察や打



写真2 庶民の住まい(ルアンダにて)



写真3 荒野を突き抜ける道(ルアンダ~ロビト)



写真4 活気のあるバイアファルタ漁港

合せもあったが、本当の目的地はルアンダから南へ850kmのところにあるナミベという港町。飛行機での移動方法もあるのだが、ある情報通から「国内線の機体は大切に長く使用している」とのことで、2日間かけての車での移動とし、ルアンダとナミベの中間地点にあるロビトで1泊することとした。

ルアンダ~ロビト間は、舗装してある片側1車線の道を、時速100kmを超えるスピードで突き抜ける(写真3)。延々と荒野が続き、たまに集落が現れる。期待してい

た野生動物を見ることは一度もなく、ドライバーに命を預けるのみであった。

朝6時にルアンダを出発し、ロビトに着いたのは16時頃。移動に約10時間を要したが、ここはまだ中間地点。明日の移動に備え、この日は早めに就寝。この時、誰もが翌日に起こる「アンゴラの洗礼」を予想だにしていなかった。

行く手を阻まれ転進

翌朝、いよいよ、ナミベへ出発である。朝6時にロビトを立ち、



図1 アンゴラ共和国の地図

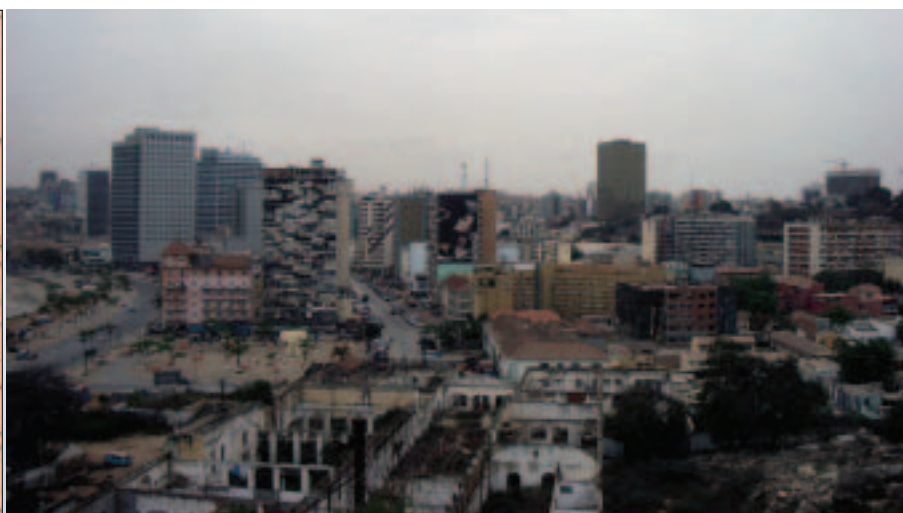


写真1 ルアンダ中心部



写真5 いつまでもポーズを崩さない女の子



写真6 引き返さざるを得なくなったポイント



写真7 昼食(左:もつ煮込み、右:お豆スープ)



写真8 トラックを追い越す1号車の雄姿
(ロビト〜ルバンゴ)



写真9 サンセット(ロビト〜ルバンゴ)



写真10 決して珍しい光景ではありません
(ロビト〜ルバンゴ)



写真11 輝きを放つボディと無惨なタイヤ



写真12 ルバンゴ近くの絶景



写真13 調査団と現地ドライバー

南に1時間ほど走ったところにあるバイアファルタ漁港を視察した(写真4)。車のドアを開けたとたん、想像を絶する「臭い」に吐き気さえ覚える。漁港では、荷車に30cmサイズの魚を山盛りに乗せ、そこに群がる大量のハエとともに運んでいる。冷蔵・冷凍施設はなく、優に30℃を超える気温の中で、とてもではないが、我々日本人が口にできるようには思えない。

漁港の視察を30分程度で終え、車はさらに南下する。次第に道は未舗装となり、砂漠をすれ違う車もほぼゼロに等しい。隣に座る上司は終始、自前のコンパスで南を確認している。3時間ほど走り続け、皆が不安を感じ始めたその時、小さな村に遭遇した。

その村の女性は胸を露わにし、腰には吹き矢の様な物さえ携えている。木陰にいた数人の子供達は、車が珍しいのか、満面の笑みを浮かべこちらに手を振っている。この光景を目の当たりにし、どこに自分たちがいるのかはわ

からないが、今まで見てきた集落とは違い、ここが現代文化から遠くかけ離れた場所であることだけは認識できた。

村の女性によると、ナミベに向かう道は間違っていないとのこと。頼もしい彼女の言葉を信じ、村を抜けると、そこに「車の走れる道」と言えるものはなく、人頭サイズの石がゴロゴロし、トヨタの誇るランドクルーザーでさえ行く手を阻まれる。この石がこの後の事件を巻き起こすきっかけとなる(写真6)。ドライバーが徒歩で数10m先まで確認に行き、遠くで大きく「×」と教える。行くも地獄、戻るも地獄である。ここで、我々は大きな決断をする。海岸線を通るルートではなく、来た道を数時間戻り、ナミベより約200km内陸にあるルバンゴという山岳都市を目指すこととしたのである。

アンゴラの洗礼

途中の街? で遅い昼食、お豆スープやもつ煮込みを取り(写真

7)、山岳道路との分岐点に戻った頃には、既に15時を過ぎていた。ルバンゴまでは、まだ400kmある。つまり、目的地のナミベまでは、あと600kmあることになる。

山岳ルートは高速道路を建設中であり、一部供用区間も存在するが、ほぼ旧道、と言うことは悪路である。この道は幅が狭い上、対向車も多く、大型トレーラーと頻繁に出くわす。前方に車が走ると、砂煙で視界は数mしかない。しかし、時速30kmも出ていないであろうトラックを幾度となく追い越さなければ、いつ到着するか知れない。「ドライバーは前が見えているのだろうか」「それとも一か八かで追い越しているのだろうか(写真8)」と考えたくもなる。

車2台での移動であったが、いつしか1号車の姿も見えなくなる(私は2号車)。もちろん携帯電話も圏外であり1号車との連絡も絶たれたが、ルバンゴでの合流を固く誓い合っていたため、気にせず先を急ぐ。そのうち日も暮れ始め、

遠くでは山焼きがちらちらで確認できる。夕日はこの上なく美しい(写真9)。しかし、ここはアフリカなのだ。「生きて日本に帰らねば!」と決意を新たにする。ラジオも受信できないため、ドライバーが持ってきたアフリカ音楽を延々聴きながら、体を悪路から守っていると、空には見たこともない数の星々。山岳ルートを選んだことで得られた唯一の幸せを感じた。この感動は一生忘れない。

ルバンゴに到着したのは22時頃。1号車に電話をかけるが繋がらず、ルバンゴの街を徘徊しても1号車は見当たらない。これまでの危険を伴う悪路を思い起こすと、あらぬ想像しか浮かんでこない(写真10)。宿のあるナミベを目指すことも考えたが、ドライバーの疲労は極限に達しており、断固として運転を拒否するため、ここは彼の体を考え、車中で1泊することとした。明日の朝には連絡を取れることを信じて……。

1号車発見!

翌朝5時に目覚め、1号車と連絡を取ろうとするが、いまだ行方不明。ルアンダに残った調査団メンバーに事情を説明すると、「1号車の行方が確認できるまでルバンゴに待機すること」とのこと。昨晚も食事をしていなかったため(前日のお昼に食べたお豆スープから何も食べていない)、1号車の安否が気になりつつも、朝食をとることとした。泥だらけの車を路肩に止め、やっとのことで見つけた食堂で、サンドウィッチを口に運ぶ。

8時頃であったらだろうか、携帯が鳴る。1号車からである。「もうすぐルバンゴに到着する」と。しかし、相手の声には力がない。聞けば、2度パンクをしたそうであ

る。1度目は修復不可能な状態までタイヤが裂け、2度目は、走行はなんとか可能であったものの既にスペアがない状態であったため、夜間の走行を避け、極寒の山奥でビバークしていたらしい。アフリカと言えども、夜は10℃近くまで気温が下がる。ともあれ、最悪の事態まで想定していたため、皆ほっと胸をなで下ろした。

ナミベへ向けて再出発である。車に戻ると、過酷な道を走破してくれた我らのランドクルーザーは見間違うほどの輝きを放っている。子供達が洗ってくれたらしい。当然、見返りは要求された(写真11)。

ルバンゴを発つとすぐに、グラウンドキャニオンを思わせるような渓谷に出くわした(写真12)。標高1,800mから一気に下るその光景は、皆の疲労を吹き飛ばした。ナミベまでは、およそ3時間。荒野の中の立派に舗装された道を西へと向かう。帰路のことなんて今は考えたくもない。

陽気な人々

ナミベでの滞在10日間は、関係機関との打合せや現地調査などでスケジュールは極めて密であった。その拠点となるホテルはというと、コンテナを改造したいわゆるコンテナハウスであった。実のところ、この名称から想像されるような劣悪な環境ではなく、中庭を備えるなど、小綺麗な施設であった。部屋の明かりが裸電球1個であったり、シャワーのノブに軽く電気が流れるなどはご愛敬。既にアンゴラに体が慣れてしまったのか、何も気になるほどではなかった。

この国の人たちは、非常に陽気である。喜怒哀楽が激しい。こちらが心を開けば、とても良い

笑顔で迎えてくれる。すぐアミーゴ(友達)になってしまうのである。そのため、我々の業務に対しても非常に協力的で、大きな問題もなく至ってスムーズに事を運ぶことができた。しかし、この陰には、アポイントを含めたすべてをコーディネートして下さった方の、涙ぐましい努力なくしては語れないことも事実である。

ルアンダへの帰路も、パンク、ラジエーターの故障、ロビトのホテルの一方的な予約取り消しなど、お伝えしたい事件は山ほどあるが、割愛させて頂く。

アンゴラの記憶

アンゴラは何故かもう一度行きたくなる国である。この度は観光名所を訪れたわけではなく、記憶に残るは「ただただ凄まじかった3週間」である。しかし、どこか惹き付けられる。いつの日か、「新婚旅行はアンゴラに行ってきた!」などと耳にしたいものである。中国の進出が著しい中、アンゴラがやがてアフリカを代表するような国となるために、日本にできる支援(物だけではなく)は、この国で見た星の数ほどあると感じた。

最後にポルトガル語を少々。ボンディーア=おはよう。ボア・タルドゥ=こんにちは。ボア・ノイトゥ=こんばんは。そして、私と上司がこれらの挨拶の次に覚えた言葉、シンゼイロ・ポルファボール=灰皿を下さい。

<参考文献>
「駐日アンゴラ共和国大使館ホームページ」
(http://www.angola.or.jp/jp_b/)

<出典>
図1: 駐日アンゴラ共和国大使館HP